

2017年10月5日

秋、人の意志について思う

九州工業大学学長 尾家祐二

大学院博士前期課程及び後期課程の学生を対象として、9月22日には学位記授与式、10月2日には入学式を行いました。学位記授与式では、15の国と地域からの33人の留学生を含む45人が修士または博士の学位を取得し、入学式では16の国と地域からの44人の留学生を含む49人が大学院に入学されました。大変嬉しいことです。

この時期は、多くの留学生が卒業し、入学する時期です。日本も、かつて7世紀から8世紀にかけて、多くの留学生を隋と唐に派遣しました。遣隋使及び遣唐使です。隋や唐と交流し、制度や技術を学びました。大使等と共に僧など多くの留学生も送り、中国からも僧などが来日しています。(東野治之著「遣唐使」岩波新書) 駐日アメリカ合衆国大使を務めたライシャワー氏は、著書「ライシャワーの日本史」において、遣隋使及び遣唐使を取りあげ、「このような使節派遣からただちに政治的な成果が上がることはほとんどないし、経済的意味もたいしてなかった。しかし、文化的重要性にははかり知れないものがあった。」と述べ、「僧侶や学者、美術家をはじめとして様々な分野の専門技術者がこの使節団に加わり・・・日本に帰ると、それぞれの分野で指導的な立場についた。・・・このようにして中国に留学生を送ったという点で、日本の指導者はまことに賢明だったと言わなければならない。これは、いわば世界最初の組織的な海外留学生派遣計画であった。」と述べています。今も、私達は、その恩恵に浴していることが数多くあると思います。

5月に本学の連携大学である揚州大学を訪問しました。上海虹橋駅から鎮江南駅まで中国高速鉄道に1時間ほど乗り、そこから車で1時間ほど移動すると揚州市に着きます。そこに、揚州大学があります。学生数4万人以上という大規模な総合大学です。これまで2007年に国際交流協定を締結後、2009年にはダブルディグリープログラムの協定(両大学に在籍し、両大学の学位を取得することができる教育プログラム)を締結し、毎年3名～5名の学生を本学に受け入れています。大変友好的な関係を築いており、その相互確認と、教育並びに研究に関する連携活動をさらに発展させること等について、焦

新安(JIAO Xinan)学長と話をすることができました。その際に、学長が、本学との連携に強い関心と期待を示されていることを話されるとともに、揚州と日本を繋ぐ鑑真和上の話をされました。鑑真和上は揚州の出身だったのです。ずいぶん以前に読んでいた井上靖著「天平の薨」(新潮文庫)のかすかな記憶を辿っても、その際は、その事までは思い出せませんでした。学長からは、揚州にある鑑真和上ゆかりの大明寺を訪問することも薦められました。

さて、そこで、帰国して、「天平の薨」を再度読み、上記「遣唐使」の本も新たに読みました。そして、先日、久しぶりに、奈良の唐招提寺に行きました。鑑真和上のお墓があり、そこには、日中友好を祈念して、揚州の木である瓊花が植樹されていました。揚州は、遣唐使の経路において、重要な都市であったことを再確認しました。「律令国家として第一歩を踏み出してまだ90年、仏教が伝来して180年、政治も文化も強く大陸の影響を受けていたが、何もかもまだ混とんとして」(「天平の薨」)いた日本においては、まだ仏教の教義を伝えることができる学徳優れた人物がいませんでした。仏教の基準、標準となるようなものが必要であるとの考えでしょうか、733年遣唐使として派遣された僧の使命は、唐からそのような人を招ぶことでした。鑑真がその要請を受け、5回目の渡日の試みが成功して、日本に到着できました。

唐との行き来は、船を用い、難破することも多く、亡くなった人達もたくさんいたとのこと。まさに命がけです。生きて、日本に戻ることができた人達のその後の活躍による成果はもちろん称賛されるべきですが、不幸にも亡くなった人についても、学び伝えたいというその意志は尊く、その人に接した人々等によって、その意志が受け継がれてきたことと思います。私達は、何を成しえたか、だけではなく、何を成そうとしたか、その意志に光を当てることが大切であると考えます。全く異なった文脈ですが、意志については、織田信長を主人公とした辻邦夫著「安土往還記」(新潮文庫)の中の、「私が彼のなかに見るのは、自分の選んだ仕事において、完璧さに達しようとする意志である。私はただこの素晴らしい意志のみ・・・私はあえて人間の価値と呼びたい」という一節も印象的です。

大学は好奇心、探求心そして学びの意志を持った人達が集まる場所です。学びを通して、またそれらの意志が互いに影響し合って、新たな意志が生まれ、育ち、その後の人生に良い影響をもたらすことを願っています。